

エッセイ集

『出雲国風土記』と松江の歴史 エッセイ1

『出雲国風土記』の 郷の伝承

〈松江市編〉

森田喜久男

千酌驛郡家東北
 餘戸里
 早郡 説名如意
 賀比賣命ミコト法吉鳥
 法吉郷郡西家正
 云生馬
 子ハ尋イロ鉾ホコ長ナガ

【表紙写真】 『出雲国風土記』写本（古代文化センター本）

1 著者は淑徳大学教授 森田喜久男さんです。

2 本文は、森田喜久男さんの書下ろしです。

3 写真は、松江市の職員が撮影したものです。

4 写真の引用はかまいませんが、引用先（『出雲国風土記』と松江の歴史）を明記してください。

5 「『出雲国風土記』と松江の歴史」は次頁の9編を公開しています。本編と一緒に、是非ご覧ください。

< 公開中 >

A 本文編 (全5章)

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

B 詳細解説編

1 『出雲国風土記』と松江の山と野 詳説

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

C エッセイ集

本編

1 『出雲国風土記』の郷の伝承 (松江市編) [森田 喜久男]

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

2 『出雲国風土記』の山 登頂記 —「風土記の山」の風景と魅力— [三代 隆司]

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

3 『出雲国風土記』にみる古代人のレジャーと観光 (松江市編) [森田 喜久男]

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

D コラム集

1 地質学からみた『くにびき神話』 [野村 律夫]

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

2 『出雲国風土記』の布自枳美高山・女嵩山と嵩山・和久羅山

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

3 『出雲国風土記』に登場する豪族 出雲臣と社部臣

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

E 読下し編

(松江市部分 巻首・意宇部・島根郡・秋鹿部・巻末の一部)

<http://UR/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL/URL>

『出雲国風土記』の 郷の伝承

〈松江市編〉

はじめに

「出雲はわけても神の国である」小泉八雲（ラフカディオ＝ハーン）は、そのような言葉を残しました。「神々の国、出雲」と言えば、出雲に住む方々は、出雲大社や神在（かみあり・じんざい）祭を連想すると思います。しかし、神々は、もっと素朴なところで私達の生活している場所に息づいています。

たとえば、『出雲国風土記』に出てくる地名は、その場所で神様が何かをなさったことにちなむのです。私たちの住む地域の地名は、『出雲国風土記』の神話と深く関わってくるのです。

目次

1. 『出雲国風土記』の地名由来
 - (1) 意宇郡の地名由来 001
 - (2) 島根郡の地名由来 002
 - (3) 秋鹿郡の地名由来 003
2. スサノオノミコトの御子神の役割 004
3. 神の伝承と国作り 005

1

『出雲国風土記』の地名由来

(1)意宇郡の地名由来

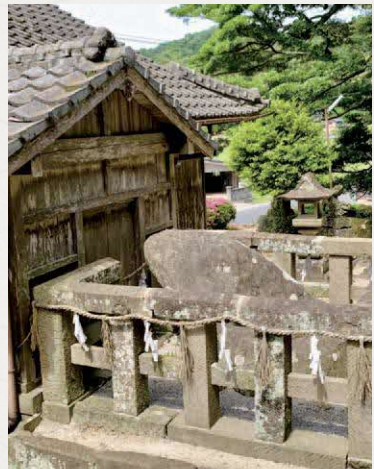
安来の郷 たえば、松江市の隣の安来市ですが、安来という地名の由来は何か、ご存知でしたか。

スサノオノミコトが、出雲各地を巡行し、この地にやって来て、「私の心は安らかになった」と言ったのです、だから安来と呼ばれるようになったという。安来は、スサノオノミコトを癒やした場所だった。では、松江市の場合はどうだったのでしょうか。

大草の郷と山代の郷 まず、意宇（おう）郡大草郷です。そこは古代出雲の政治の中心、国庁が存在した場所ですが、地名の由来はスサノオノミコトの子、アオハタサクサヒコノミコトがいたことにちなみます。隣接する山代郷には、天下を造ったオオアナムチノミコトの子、ヤマシロヒコノミコトがいました。

拝志の郷 玉湯町から宍道町にかけて広がっていた拝志（はやし）郷ですが、その地名の由来は、オオアナムチノミコトが越の国を平定するために出発しようとしたところ、草木がいっせいに生えた。オオアナムチノミコトは、それを観て、「私の心をはやしてくれるのだな」と述べたとのこと。オオアナムチを勇気づけた場所ということになるのでしょうか。

宍道の郷 今日の宍道町、宍道湖の地名の由来となった宍道郷では、オオアナムチが犬を連れて猪狩をしています。追いかけた犬と追いかけられた猪が石となって『出雲国風土記』が書かれた時も残っていたと書かれています。



宍道町石宮神社のご神体
(風土記記載の犬石と伝えられます。)

(2)島根郡の地名由来

朝酌の郷 次に島根郡にいきましょう。まず、これも今日まで松江市朝酌（あさくみ）町という形で地名が残っている朝酌郷ですが、これはクマノオオカミ（熊野大神）がこの地に住む人々に対し、朝夕の食事を提供するように命じたことにちなみます。

山口の郷と手染の郷 山口郷は、スサノオノミコトの御子、ツルギヒコが布自枳美（ふじきみ）山（嵩山）に鎮座するにあたり、その登山口とした場所であり、手染（たしみ）郷はオオナムチノミコトが丁寧に造った国なので「たし」と呼ばれていたのが、訛って「たしみ」になったと『出雲国風土記』には書かれています。



宍道湖大橋からみた嵩山（左）と和久羅山

美保の郷と方結郷 島根半島の先端、美保関に相当する美保郷には、オオナムチノミコトが今の北陸地方にあたるコシの国のヌナカワヒメを妻として儲けたミホスミノミコトが鎮座していた場所、方結（かたゆい）郷はスサノオノミコトの御子、クニオシワケノミコトが「ここは国の形がよい」と述べた場所と伝えられています。

加賀郷 加賀郷は、佐太神社に祭られているサダ大神が生まれた場所とされていますが、この神が生まれようとしていた時、母のキサカヒメノミコトが「暗い岩屋だこと」と述べて、黄金の矢を射たところ、光り輝いたことにちなみます。このキサカヒメノミコトはカミムスヒノミコトの娘でもあります。



潜戸（くけど）
サダオオカミが生まれたという窟

『出雲国風土記』の郷の伝承

生馬の郷と法吉の郷 そのカミムスヒの御子は、生馬（いくま）郷と法吉（ほうき）郷にもいました。

生馬郷では、ヤヒロホコナガヨリヒコノミコトが「私の御子は、いつも心穏やかでイクム（憤る）ことはない」と述べたので、イクマという地名がついたのだと伝えられています。一方、法吉郷は、法吉鳥（ウゲイス）に変身して飛び立ったウムカヒヒメノミコトがこの地に降り立った場所と呼ばれています。ちなみに、このウムカヒヒメノミコトは、『古事記』では、兄弟の神々に殺されそうになったオオナムチを蘇生させた女神として登場します。

(3)秋鹿郡の地名由来

恵曇の郷 そして、秋鹿郡の地名。松江市鹿島町恵曇（えとも）に地名が残る恵曇郷は、スサノオノミコトの御子であるイワサカヒコがこの地にやってきて、「国の形が鞆（とも 弓の弦が当たらないように腕にまく武具）のように弧を描いている」と嘆じた場所です。どこから見た景観なのでしょう。

多太の郷・大野の郷 多太郷は、スサノオノミコトの御子神であるツキキネトオニルヒコノミコトが、この地にやって来て、「私の心はタダ（正）しくなった」と宣言し、大野郷ではワカフツヌシノミコトが狩をして、獲物の猪を見失った場所がウチノ（内野）となり、それが後に大野という地名に変わったのだそうです。

スサノオノミコトの 御子神の役割

『出雲国風土記』の地名に記された神々の姿ですが、じっくりと観察すると面白い問題が浮かび上がってきます。

たとえば、スサノオノミコトの御子神の果たした役割ですが、スサノオノミコト自身は、出雲各地を巡行し、『古事記』に見えるオホクニヌシノミコトによる葦原中国（あしはらのなかつくに）全体の国作りよりもスケールは小さいものの、「小さな国の国作り」とも言うべき、土地の開墾といった具体的な開発を行う存在として描かれます。

たとえば、飯石（いいし）郡須佐郷条において「大須佐田」・「小須佐田」を定めたと記されています。一方、御子神達も各地を巡行し、国作りの一端を担っているのです。具体的には、スサノオノミコトが、親神として出雲における「国作り」全般をつかさどり、「国作り」の中の植林の役割をアオハタサクサヒコが分掌し、武力による制圧の役割をツルギヒコが分掌する。クニヲシワケは統治に関する権能の分掌したと考えられます。

つまり、『出雲国風土記』に見えるスサノオノミコトと御子神の地名起源伝承を分析することによって、出雲においてオホクニヌシノミコトの国作りとは異なる神話、すなわち、スサノオノミコトが御子神達との共同作業によって行われた国作りの神話が浮かび上がってきます。では、そのような神話はどのような人々によって語り伝えられてきたのか、その点が気にかかるところです。

3

神の伝承と国作り

この問題を解明する手がかりは、現地にあります。たとえば、松江市役所の鹿島支所の裏手に恵曇（えとも）神社があり、本殿の脇を登っていくと、巨大な磐座（いわくら）が見えてきます。地元では「座王さん」と呼ばれています。これが恵曇の名づけ親イワサカヒコノミコトが降り立った場所であるとすると、そこはまさに恵曇における国作りの舞台となります。恵曇郷は日本海に面していましたが、内陸部は湿地が広がっていました。そこで、島根郡の郡司社部（こそべ）氏の祖で



恵曇神社の蔵王石



現在の佐陀川下流に残る「いわかべ」

ある波蘇（はそ）という人物が、磐壁（いわかべ）を切り開き、水はけを良くしたという伝承が『出雲国風土記』に見えます。このような開発の歴史をもとにスサノオノミコトの御子神による地名起源伝承が生まれたのかも知れません。

神々が活躍する地名起源伝承には、地域の歴史をさぐる手がかりが含まれているのです。

ヒストリー作成体制

- 事務局：松江市文化スポーツ部松江城・史料調査課、文化財課
- 執筆：森田喜久男
- 編集：文化スポーツ部、丹羽野裕が松江市文化財保存活用計画協議会および事務局内で協議をして編集した。

松江のヒストリー集 5

『出雲国風土記』と松江のヒストリー【エッセイ集】

エッセイ1 『出雲国風土記』の郷の伝承

令和8年(2026)3月30日

松江市文化スポーツ部 松江城・史料調査課

